滋賀県安曇川沖積平野の条里制集落・針江地区の重要文化的景観「水辺景観」における景観の関係性の研究

小谷（吉田） 裕枝
一級建築士事務所ミラボ / 3--1ab

1．はじめに

近年、風土に沿った生活景観である文化的景観に、国内外から関心が寄せられている。文化的景観とは、UNESCOの世界文化遺産に代表されるような、キリスト教世界における名所・旧跡のみならず、人間の生活や風土が歴史的文脈として蓄積し、その土地履歴と表象空間とが渾然一体となって、表出した景観である。そして、人間の生活と共に常に変化し続ける文化的景観を、どのようなバランス下で保全するのが妥当かを議論するためには、まず、景観の背後に存在する関係性を読解する必要がある。しかし、文化的景観の概念としての歴史は浅く、又、文脈的読解に必要な通時的な史料には、しばしば史料上の制約がある。そのため、この分野に関して、未だ十分に研究が進んでいるとは言えない。

翻って、滋賀県高島市針江地区には、湧水を利用した生活井「カバタ」とそれらに繋がる水網空間を今も活用する居住域、水田域、葭帯という三つの領域がある。又、それらに共通して伝統的に存在する、景観の「利用」と「保全」が連鎖する水環境システムが総合的に評価され、平成22（2010）年、「針江・霜降の水辺景観」として、国の重要文化的景観の一つに選定されている（図１）。

古代から政治・経済の重要な拠点であった滋賀県には、琵琶湖をめぐる統一的な条里プランが存在していた。中でも、琵琶湖西地方に立地する針江・霜降地区は、中世、比叡山延暦寺直轄の荘園である木津荘に属したため、条里プランに沿った、多岐に渡るその景観要素の全容について、唯一現存する中世二史料に記載がある。又、その二史料の作成年差に起こった、中世での集村化、耕地の拡大は、地域の近現代の景観のルーツと考えられている。これらの急激な変化は、中世から進行する、琵琶湖や河川等の大きな地形変化に由来すると言われている[1)]。

図１　現在の針江地区の位置

そこで当該地に関して、これら貴重な二史料を基に、歴史地理学における中世景観研究に、膨大な知の蓄積がある。一方、特徴的なカバタや水網空間に関する現在の集落景観に関しては、民俗学や建築計画学の分野で、充実した既往研究が存在する。一方で、近代化以降、現在迄の近現代の研究が欠如しているため、こうした異分野の研究成果の根源に存在するはずの、大きな秩序については、依然不明なままである。そこで、これら既往研究の成果が、文化的景観の今後の保全を考えるための、十分な礎と成り得てはいないのが、現状である。

これを踏まえ、本研究は、貴重な中世史料を備えた条里制集落であり、かつ、重要文化的景観の指定三領域を全て集落域に含む、針江地区を対象地とした。そして、既往研究の成果を布石とし、近現代における調査・分析を補完することで、針江地区「水辺景観」の継承・淘汰に関する、中世から現在に至る連続性を検証し、その景観に内在する、多様な関係性の解明を目的とした。

本年報では、その研究の概要を報告する。

2．地域レベルでの集落居住域における、中世から継承された「文化的景観」の特徴

（1）研究の概要

重要文化的景観地区の三領域を考察する前提として、まず、より広域な範囲を研究対象地とし、多様な景観要素の関係性を探るべく、集落形成のルーツとしての中世から継承された、広義の「文

化的景観」の現状（2015年調査時）と、その特徴を明らかにした。具体的な対象領域は、針江の他、８集落を含む範囲で、中世木津荘南域に相当する。又、広義の「文化的景観」として、中世史料に記載のあった田と水田、畑、屋敷地（住宅・宗教施設等）、道路、河川及び水路の５項目と、共同体体制を考察可能な墓地と藪の計７項目を、分析対象要素とした。

方法としては、既往研究による方法論[2]に準じ、同一位置での直前後の景観に起こった社会的作用を検証し、「土地履歴」の考察を行った。具体的には、対象地全域の地図と文書が存在する5時点（1400年代初期と1422年の中世２段階、明治初期1873・74年頃、圃場整備をはさむ、 1965年と2015年）から、条里プラン上の分布変化を考察し、中世から継承された「文化的景観」を特定した。尚、質的変化についても検討し、補完している。

又、条里制グリッドでの景観要素の存在率・継承率の変化を分析し、各時代の変化の特質をマクロに考察した。特に、圃場整備前後の２時点のベースマップから特定可能な施設を拾い上げ、中世からの土地履歴を遡ることで、近代化以降の公共施設の敷地属性の変化を分析した。

（2）研究の成果

①条里地割に展開する、以降の景観の礎、景観の骨格や景観要素の関係性、敷地の文脈を形成した点が、中世から継承される「文化的景観」の特徴だと言える（図２）。

②存在率・継承率の変化から、改めて、当該地の景観は、中世集村化と圃場整備前後の２点で、著しい変化があったことが分かった。又、近代化以降、中世に構造物のなかった領域を開発し、新施設が建設されている。公共施設が核として、居住域の開発を牽引していった伝統的地域の空間構成特徴にも、変化があったことが分かった。

総じて、住民生活の上で、保全が有益である「文化的景観」は、形を変えながらも、現在も受け継がれていることが浮き彫りになった。又、歴史的な景観保全に関する共同体の仕組みから、水辺景観の保全には、重要文化的景観地区外にある、例えば藪のような、一見関係の薄い他要素の保全状況も作用することが推測される。

景観は、大きく間接的に繋がっていると考えられる。

３．針江地区湖岸域の所有・利用形態と景観の淘汰・継承

（1）研究の概要

次に、重要文化的景観の三領域から、抽水植物の群生地である湖岸域に焦点を当て、古代から現在（2015年）に至る所有と利用形態、景観の継承・淘汰との関係性を分析した。具体的には、既述の5時点のベースマップを用い、①周辺地域のマクロな生業史・開発史②湖岸域の所有・利用変化、③湖岸域の景観変化、から、分析した。

次に、葭帯が淘汰した領域を取り上げ、その所有・利用形態に関する歴史的変遷から、景観の継承・淘汰を決定する複合的要因を考察した。

又、前述の領域は、高度経済成長期に、投機目的に別荘地として一旦開発されたものの、10年以上放置された後、俄に分譲住宅地として開発された経緯がある。そこで、特にこの2回目の住宅地開発に着目し、住宅地図から湖岸域での新築建物数の変化を拾うことで、「里山」用語のメディア表出頻度、社会的変化と照会した。そして、その開発を牽引した社会的背景を総合的に考察した。

（2）研究の成果

①湖岸域には、葭地が淘汰された領域と、されなかった領域が存在するが、その決定的違いは、所有と利用形態に関する、歴史的一貫性の有無にあることが分かった。淘汰された葭地は、中世から既に田地の開発が始まり、その後幾度となく頓挫を繰り返していたため、土地の所属は現在に至るまで、常に定着することがなかった。

②湖岸域の住宅開発には、一般的な新築住宅の件数推移に関与すると考えられる社会経済的要因よりも、むしろ、「里山」用語

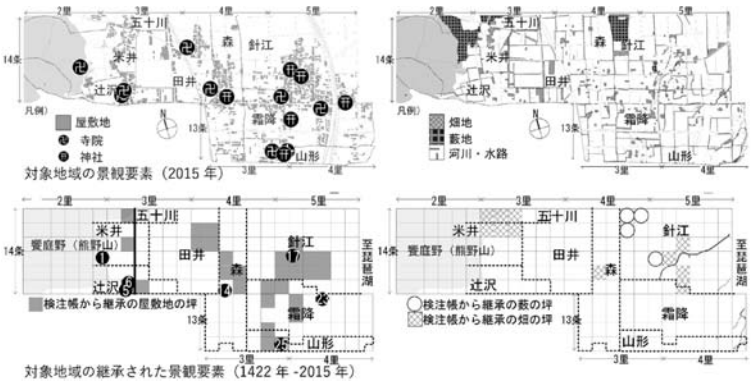

図２　2015年現在（上）と中世から継承された（下）対象地域の景観要素

のメディア露出が連動することが分かった。

総括として、「利用」と「景観保全」が連動する地域の水環境システムには、その前段階に、景観を利用する人々の意識や関心に訴えかけることが必要で、歴史的な利用の工夫は、それらに関連づけ計画されたと推定される。

更に、完全に平等に開かれた属性による利用よりもむしろ、世代を超えた責任の所在が明らかな、集落や隣組のような特定の属性による利用の方が、より淘汰に強い、持続的水環境システムにつながることが導き出された。

４．針江地区の換地前後の耕作地水利と共同体との関係性

（1）研究の概要

重要文化的景観の三領域の耕作域に焦点を当て、昭和59-60年（1984-85年）に行われた、針江地区の換地前後の所有状況の変化から、耕作地水利における共同体の関係性を明らかにした。

換地とは、圃場整備と連動し、近代以前、地域に伝統的にあった耕地の分散所有の非効率性を是正すべく、土地の集約化を目的とした土地交換である。この田の分散所有形態については、中世史料に既に記載があり、又、その範囲は木津庄全域に及んだという。しかし、そのメカニズムは不明とされている[1)]。

具体的には、「換地計画書（針江地区）」を用いて、針江地区の耕作地の、換地前後の耕作地の土地利用と等級、所有分布状況の変化を、視覚的・定量的に分析した。その後そこから、属性ごとの所有変化と、各小字の所有属性比率の変化を考察した。最後に、換地以前の個別の直近耕作地間の水利の関係性から、耕作地水利を通した集落内外の共同体体制の特徴を明らかにした。

（2）研究の成果

①耕作地の物理的形状を改変した圃場整備と同様、換地も又、耕作地の所有形態を大きく変え、それにより合理目標も達成されたのだが、耕地水利に関する諸関係性は、換地を経ても、概ね継承されたことが分かった。

②地域に伝統的に存在する、細分化された耕作地の分散所有は、複数の水路と関連づけることで、耕作者個人の集落への所属意識を高める目的があったとされている。

この田の分散所有形態は、換地前（1984年）の針江地区の耕作地所有に具体的に見られる。そして換地後も、それら近隣集落の居住者は、変わらず針江地区の耕作地を所有する。（図３）又、その属性は、かつて饗庭井を共同利用した近隣集落群と一致することも分かった。

③耕作地として開発の古い小字と、新しい小字では、所有属性の特徴が異なり、古い耕作地ほど、針江内外のさまざまな属性に遍く所有され、新しい耕作地には、特定の属性に偏重傾向があることが分かった。

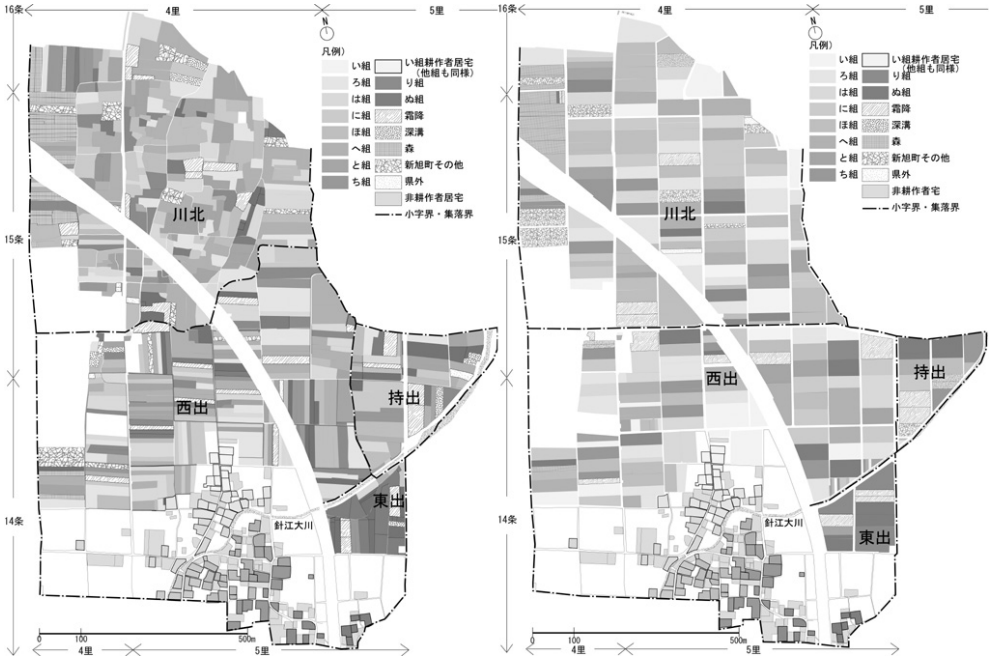

図３　換地前（左）と換地後（右）の針江地区の属性別耕作地所有分布の変化（1984-1985年）

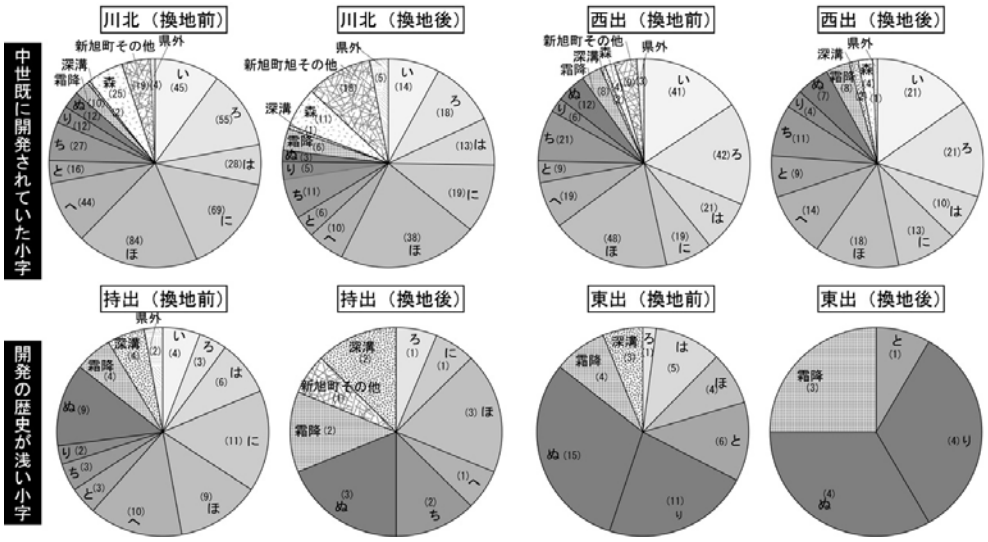

図４　換地前（各左）と換地後（各右）の針江地区小字の耕作地所有属性比率の変化（1984-1985年）

又、その所有属性に関する小字の特徴的な傾向は、換地後も踏襲されていることも明らかになった。（図４）

④開発の古い居住域の耕作者ほど、他属性の耕作者と、密で複雑な耕作地水利の関係性を持つことが分かった。

つまり、換地を経て、水道による灌漑がかつての井堰による耕作地水利を形骸化しても、その地域に開かれ、細分・分散化された耕作地の一見非効率的な所有形態は、依然、その関係性の多くが継承されていると言える。

これらは、生産的農業の足かせとも捉えられかねなかったが、そこには集落の人達にとっての「必然」があったため、淘汰されなかったのだと考えられる。

５．針江地区の「カバタ」の排水系統と耕作地の水利、共同体との関係性

（1）研究の概要

重要文化的景観の三領域の内、居住域の「カバタ」（図５）に着目した。尚、「カバタ」は湧水利用の生活井であるが、排水は必ず集落の水網空間と接続する必要がある。

本研究では、既往研究で2008年に調査された[3]居住域の「カバタ」の分布から、その排水系統と耕作地の水利との関係性を明らかにした。

具体的にはまず、「カバタ」所有者の属性に着目し、「カバタ」の分布を、耕作地の所有・非所有から類型化した。その後、「カバタ」の排水系統を隣組組織でグループ化し、共同体の関係性を考察した。更に、「カバタ」の排水の川上・川下関係から、「カバタ」を通した隣組組織の関係を洗い出し、そのシステムを考察した。そこから、集落内外の共同体体制について考察した。

図５　比良山からの湧水利用の生活井「カバタ」

（2）研究の成果

①分析から、「カバタ」の種別は、耕作地所有・非所有に関する所有者の属性と連関することが推測される。

②「カバタ」の排水系統と、耕作地の水利に関する隣組組織間の関係性とほぼ同様の傾向を示し、古い居住域にある隣組組織ほど、密な関係性を有することが分かった。

③針江地区の耕作地の水利系統と、居住域の「カバタ」の排水系統は、符合することが明らかになった。

これらの水利用システムの起源は不明であるが、既往研究で明らかにされている[4]中世での「水利システムを紐帯として形成されている耕作地と居館群のネットワーク構造」と同一の構造から成る。

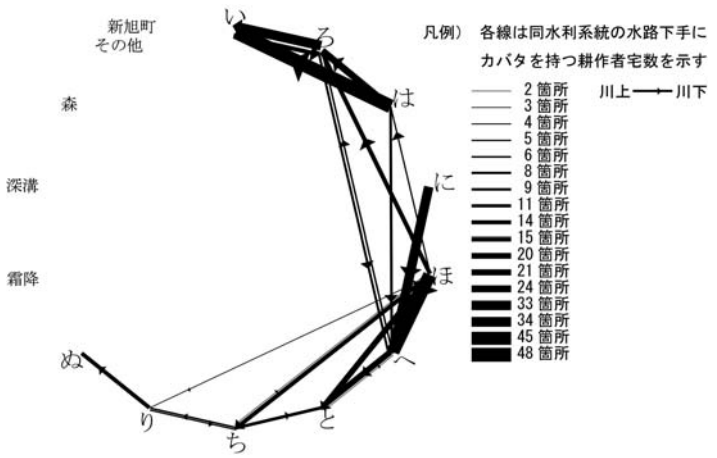

図６　針江地区の隣組組織間の「カバタ」排水の川上・川下相関関係

水利システムを紐帯として形成されるネットワーク構造である。

中世において、在地領主は、川下の灌漑権を掌握するため、幹線用水路の連結点に居館を構えたとされる。

この居住域と耕作域がリンクする水利システムは、領主や地主層のみならず、耕作者層にも共通して共有されるシステムであり、耕作地と居住域の「カバタ」における水利用を通して、日々のコミュニケーションを促進し、共同体としてのつながりを強めていたことが推測できる。

そこから浮かび上がる社会像とは、あらゆる属性が同一システムを共有する、相補的社会だと言える。（図６）

６．針江地区・重要文化的景観「水辺景観」の現在とそこにある秩序

（1）研究の概要

本研究は、針江地区生活圏の景観保全に関連する、様々な地域環境活動の現状を整理し、それらと景観保全との関係、又、その特徴を明らかにした。その後、現在の針江地区の生活圏を構成する景観の関係性を総括した。

（2）研究の成果

①針江住民が主体となる、宗教行事や地域環境活動は、地域レベルでの「文化的景観」要素の保全に、よく対応する。結果的に、共同体としての結びつきを強め、間接的に景観保全が導かれる点に特徴がある。

②針江地区の生活圏の利用・所有形態や、配置計画には、各景観要素の特性に沿って、「公」「私」が巧妙に組み合わされている。そのため、生活圏に万遍なく関心が寄せられ、結果的に持続的な利用が促進される仕組みである。

③時代を経て、既に淘汰されてしまった地域環境活動もあるが、現代の新たな地域環境活動がそれらを更新している。つまり、近代の過程で多くの関係性が淘汰されたと考えられている針江地区の伝統的水環境システムは、針江地区生活圏を覆う大きな体系の一部であり、他の景観要素の利用・保全に関する潜在的な関係性が補完することで、現在も水辺景観に内在する関係性の多くが継承されていることが分かった。この統合的システムに、針江地区の生活圏の継承の一因があったと考えられる。

７．おわりに

結論として、景観に内在する関係性が継承されることで、景観が受け継がれるというシステムの存在が分かったが、かつてない急激な近代の変化は、本来淘汰に強いはずの景観の関係性をすら侵し、景観の関係性を形骸化している。又、針江地区生活圏の景観には、歴史的に自律的な回復力が存在したが、伝統的手法による穏やかな関係性の更新を待たずして、景観が淘汰される場合もしばしば存在する。そのため、その文化を共有する様々な属性から成る人々が、その持続性を叫んでいる今がある。

この研究で改めて浮き彫りになった、景観は利用されてこそ保全されるという、水辺景観を超えた大きな文化的システムの中で、本研究で得られた歴史的な「多様な属性との共生」と「対話」というキーワードを手がかりに、これから先の住民の生活にも沿う、新たな文化としての景観保全の形を模索する必要があると考えられる。

参考文献

１）水野章二編；中世村落の景観と環境－山門領近江国木津荘－, 思文閣出版、2004
２）宮本万里子, 横張真、渡辺貴史；土地履歴の解釈にもとづく文化財としての文化的景観の捉え方の検討、ランドスケープ研究74(5), 597-600, 2012
３）石川慎治、濱崎一志；滋賀県湖西地域における湧水による伝統的集落の空間構成に関する研究－滋賀県高島市新旭町針江地区を事例として、第一住宅建設協会, 2008
４）佐野静代；中近世の村落と水辺の環境史－景観・生業・資源管理－、吉川弘文館, 2008